居間上部のたっぷりした吹き抜けは、同じ高さのまま食堂方向に繋がっていく。玄関と温室をH型をした野太い柱と梁が区切る

小玉祐一郎 つくばの家 I

1984年

中村好文 =文・イラスト
YOSHIFUMI NAKAMURA

子供のころ、「科学する心」という言葉をよく耳にしていました。

そしてその「科学する心」という言葉を聞くと、私は、中学校の国語の教科書に載っていた中谷宇吉郎の「雪を作る話」という随筆を思い出します。そのころ科学少年を自認していた私は、零下何十度というような低温実験室で、雪が（正確には雪の結晶が）作り出されていく話に胸を躍らせたことがあるのです。教えてくれた先生は女性でしたが、今思い出してもその「雪を作る話」の授業は、素晴しいものでした。授業を「名演」と表現するのは変かもしれませんが、先生は実験の様子を文章から読み解き、「こうやったら失敗して、こうやったら今度は上手くいったのよ」という具合に、実験の経過をいちいち丁寧に図解して黒板に描いてくれました。そのうちの一枚は、冷やした銅板から粉雪がチラチラ降り出す絵で、そのシュールな光景に背筋がゾクゾクしたことを今でもはっきり憶えています。

その授業からさらに5〜6年経ったころ、私は神田の古本屋街で中谷宇吉郎の『續・冬の華』という本を見つけました。背表紙に中谷宇吉郎の名前を発見したとたん、道ばたでバッタリ尊敬する親戚のおじさんに出逢ったような気持ちになり、迷わずその本を買いました。

40年ほど前に買ったその『続・冬の華』は今でも私の愛読書のひとつです。その中に建築家という職業柄、私がもっとも心惹かれ、またその内容から少なからず影響を受けた「生活の實験」という随筆の傑作があります。

1938年、中谷は札幌に自宅を新築しようと思い立ちました。ところが、科学者の目から見ると、そのころの札幌の一般的な住宅の建て方は、寒冷地という条件を考えるとあまりにも欠陥だらけでした。ものごとを科学的に考える癖、すなわち「科学する心」が骨の髄まで染みついていた中谷には、非科学的発想ゆえに莫大な燃料を無駄遣いをし、寒さに脅かされて暮らしている従来の北海道の住宅事情が、どうにも我慢がならなかったのです。そして「寒冷地の規範となりうるモデル住宅を作ろう！」と発心し、採暖方法や、断熱性能や、合理的な構造について独自の創意工夫を凝らした住宅を完成させたのです。「生活の實験」は、この普請に関する科学的考察の経緯を随筆風に綴ったものです。

前置きの中谷宇吉郎の話が長くなったのは理由があります。今回、小玉祐一郎さんの自邸「つくばの家 I」を訪れる前に、この住宅が掲載された雑誌に目を通しました。写真と図面から平面と空間の構成を読み解き、小玉さんがこの住宅に盛り込んだ機械力にたよらない暖冷房の工夫の解説を読んでいたとき、ふと、中谷の「生活の實験」のことが脳裡をかすめたのです。行間から「生活の實験」の文章が浮かび上がるようだった、と表現したほうがその感じが伝わるかも知れません。

たとえば中谷は、札幌では凍りついてしまうという理由で取り付ける習慣のなかった雨戸を、ひと工夫して硝子戸の内側に設けました。こうしておくと、凍結という寒冷地の大問題が解決されるだけではなく、絶大な断熱効果があり、昼間の太陽熱の恩恵を保持してくれるのだと説き、そのことをこのように書いています。

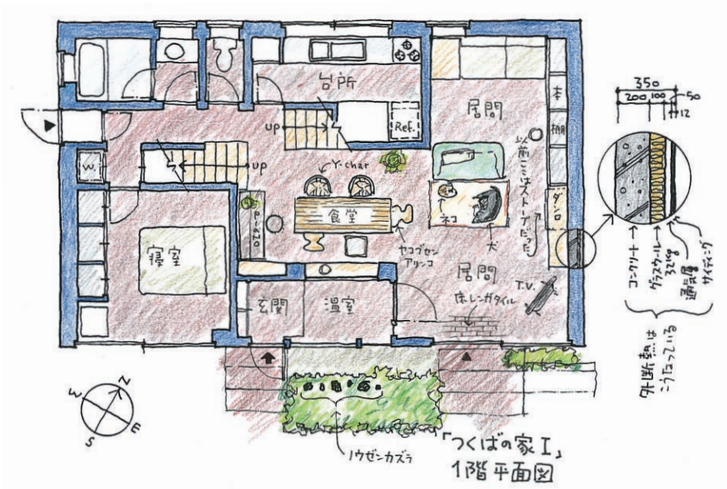
「日中少し陽が射すと、輻射によって、丁度温室の場合のように室内の温度が5、6度も上がる。北海道では夕方4時頃になるともう暗くなるので、早く雨戸を引いてこの太陽熱を保持すると、大変石炭の方が助かることが分かった」

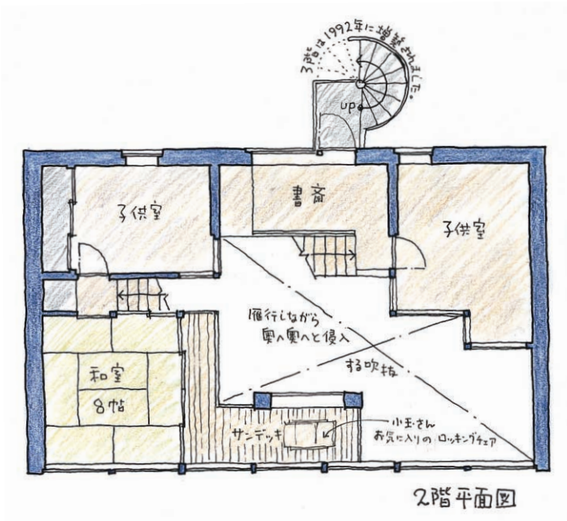
じつは、この「断熱を施した室内に日中の太陽の熱を蓄えておいて夜間の冷え込みを防ぐ」ことに着目し、綿密な観測データをもとにシミュレーションを重ねた上で積極的に設計に取り入れた実験住宅が、小玉祐一郎さんの自邸「つくばの家 I」です。中谷宇吉郎が札幌に実験住宅を建ててから45年目にして、「科学する心」を備えた建築家が現れ、中谷の意志を引き継ぐかたちで、さらに厳密に、さらに建築的に実験を推し進めたことになるのです。

2階の和室はサンデッキと呼ばれる「空中の縁側」的なスペースを持っている。話し込む小玉さんと私の背後を覆う。緑のカーテンはノウゼンカズラの葉。夏には陽射しを遮り、冬にはたっぷり陽光を取り込んでくれる「全自動型天然カーテン」

植物の生い茂る季節、建物はご覧のように前面道路からほんのチラリとしか見えない

ほら穴的な居心地を宿した居間の奥から庭の方向を見る。大きく閉ざされ、大きく開かれているのがこの住宅の特徴





2階サンデッキから吹き抜け越しに食堂と居間を見下ろす。木造真壁を表現した雁行した子供室から、宮脇檀設計の混構造の住宅「松川ボックス」を連想しませんか？

庭に入るとようやく建物の南立面が見える。建物の真ん中に日射調節の目的で植えられたノウゼンカズラが伸びに伸びて屋上にまで達している

「つくばの家 I」が完成したのは1984年1月です。機械の力に頼らず、蓄熱や通風など自然の力によって空調する住宅を「パッシブソーラーハウス」と呼びますが、小玉さんの自邸はそうした考えをいち早く、そして、積極的に取り入れた実験住宅でした。しかしこの「つくばの家 I」が、エネルギー問題や環境問題を真正面から見据えた先駆的な住宅であったにもかかわらず「反響はなかった」そうです。日本中がバブル景気前の浮き足だった時期にあり、まだそうしたことを真摯に受けとめる下地ができていなかったのです。

「つくばの家 I」を訪れたのは、梅雨の合間の薄曇りの日でした。

予想したとおり、道路からは生け垣と庭木の緑に覆われて建物の外観はほんのちょっとしか見えません。木々に覆われたたたずまいをひとしきり眺め、沖縄のヒンプンを連想させる生け垣の間隙（門？）から庭に入ろうとすると、黒々した毛並みの大型犬が勢いよく飛び出してきて、尻尾を振って出迎えてくれました。

この敷地は南側が公道に面しているので「南入り」です。「南入り」の住宅は、玄関が日当たりのいい場所の一部分を占めてしまうことになるので、東または西の側面にアプローチの小道を通してそこから入るようにすることが多いのですが、この住宅では、玄関と温室がセットになって南面のど真ん中に設けられています。このあたりの「思い切りの良さ」と「シンメトリー好み」は小玉さん「らしさ」かも知れません。そう考えつつ、私はその玄関と温室を通らずに、先ほど出迎えてくれた黒犬と連れ立って、温室脇のテラス戸から室内に入りました。

室内に入ったとたん、たっぷりした空間のふところが、しっかり私を抱きとめてくれました。床・壁・天井のすべてに、完成してから四半世紀という時間が染みついて「経年仕上げ」ともいうべき風合いと貫禄が漂っていました。蓄熱効率から選ばれた、床のレンガタイルとコンクリート打放しの壁と天井からは、いくらか武張った印象を受けましたが、木の柱と合板による真壁の表現や、障子を透過した柔らかい自然光がその印象を適度に中和していました。

室内には、かすかに清家清さんの「続・私の家」的な気配や、宮脇檀さんの「松川ボックス」的な匂いが感じられ、この住宅はパッシブデザインというだけでなく「純粋にデザイン的に考えられている！」という印象を私は強く受けました。

ところで、この住宅の特徴は、矩形のプランの中にジグザグ型の吹き抜けが奥へ奥へと侵入していくことです。そのことで空間にダイナミックな動きが生まれ、人の心もジグザグ型に奥へ奥へと誘われることになります。そして誘われたその奥には反対方向に昇るふたつの階段が待ち受けています。「どっちに昇る？」と無言で問いかけてくる階段のどちらを昇っても、吹き抜け越しに対面する形で食堂を見下ろす場所に辿り着きます。こういう遊びのある構成がこの住宅を愉しくしています。

「落ち着いたら、小玉夫人にこの実験住宅の住み心地や使い勝手について、正直な感想を聞いてみよう」と考えていましたが、ひとあたり見学を終え、食堂の椅子に落ち着いたところで美味しいワインとチーズがテーブルに載せられました（昼酒です）。夫人は終始屈託のない笑顔と明るい声で応対してくれ、その笑顔を見ていると「住み心地が悪いわけはないなあ」という気になり、質問は取りやめました。そういえば、この家の最大のテーマであるパッシブデザインのことも、聞きそびれてしまいました。そのことは、掲載雑誌に非常に分かりやすく解説されていたので、同じことを質問して、同じように応えていただくことがはばかられたということもあります。

ただ、もし私にもう2度ほどこの住宅を訪れる機会があったら、カンカン照りの真夏と、冬晴れの真冬に来てみたいと思いました。そして、それが1回だけなら、ぜひとも厳冬期にさせていただきたいと考えています。

「生活の實験」には、「日当たりの良い部屋の気持ちの良い暖かさが、いかに万遍なく家を暖めてくれる日光に負うところが多いかがよくわかった」という滋味深い言葉がありますが、私はこのことを、小玉さんの「つくばの家 I」で、しみじみ体感してみたいと思うのです。✽

愛犬と愛猫がそれぞれの居場所に気持ちよさそうにおさまっているのを見るだけで、心は和み、思わず口元が綻びます。この住宅の居心地の良さはこの写真一枚でうかがえるはず

なかむら・よしふみ――建築家／1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972〜74年、宍道設計事務所。1975年、都立品川職業訓練校木工科にて家具職人の訓練を受ける。1976〜80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
三谷さんの家（1986）、REI HUT（2001）などの住宅作品の他に、『住宅巡礼』（新潮社　2000）、『意中の建築 上・下』（新潮社　2005）などの著作がある。